

センターだより

平成22年10月15日

NO. 39

東濃西部少年センター

多治見市豊岡町1-55

TEL. FAX 23-3455

平成22年度岐阜県優良少年指導員表彰

10名の皆様 受賞おめでとうございます

平成22年11月28日(日)、揖斐川町中央公民館で開催される岐阜県青少年健全育成県民大会において、多年にわたり青少年の指導活動に尽力された方々が、岐阜県環境生活部長及び青少年育成県民会議会長より表彰されます。

東濃西部少年センターからは、下記の10名の方々が、その榮譽に浴されます。これまでの10年及び5年という年月、少年指導員としての献身的な取組みに対して、心より敬意を表します。

これからも引き続き青少年の健全育成、非行防止活動に格別のご協力、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

表彰される方々

岐阜県環境生活部長表彰（10年以上在任）

安江美好様（多治見地区指導部） 加藤隆様（多治見地区指導員）
三宅滋郎様（瑞浪地区指導員） 道林曠様（土岐地区指導員）

青少年育成県民会議会長表彰（5年以上在任）

長谷川婦じ子様（多治見地区指導部） 渡邊道子様（多治見地区指導部）
和田良輔様（多治見地区指導部） 小瀬政秋様（多治見地区指導部）
三宅敏之様（瑞浪地区指導部） 伊藤真様（土岐地区指導部）

はじめに（3地区合同研修会にあたって）

私たちが、日頃から街頭での指導活動で大切にしてきたことは、青少年との信頼関係をつくるための日常的な声かけです。彼等と正面から向き合い、声をかけ合える（言葉をかわせる）関係作りこそが、基本であるとしてきました。

これができれば、見逃していけない事実を目にしたとき、ごく自然に注意もできるはずでした。しかし、実際には、「声をかけよう」「注意しなければ」と思っても、初対面の相手では、腰が引けてしまいます。相手がグループであれば、逃げ腰にもなります。このことは、誰もが経験していることです。だからこそ、なんとかしなければならぬ大切な課題です。

この課題解決のためには、まず彼等の「本音とたてまえ」に迫ることだと考えました。すなわち、今どきの若者の物事へのこだわりとか考え方、その背景にある若者の文化や生活スタイルなど、あるがままの姿を知ることが、彼等への理解を深め、彼等に近づく手がかりになると考えたからです。

さて、当少年センターの3地区合同研修会は、今年で2回目です。第1回目から考えてきたことは、講演を一方的に聴くという形ではなく、提供された話題について話し合い、指導員全員が積極的に参加できる方法の模索でした。その一つが今回のパネル方式です。

今回の研修では、県立多治見工業高等学校の大変な協力を得ることができました。話題の提供とコーディネーターをお務めいただく富田博道校長先生はじめ、パネリストには、お2人の先生方、3名の生徒諸君、並びに3地区の指導員代表の方々に参加いただくことができました。この機会に、若者との接し方・心への迫り方を、改めて考えてみたいと思います。（少年センター）

テーマ 「若者の本音とたてまえ」

ー彼等に近づき わかり合い 共に今を見直すためにー
指導員全員参加型パネルディスカッション方式で進行

コーディネーター兼講師	県立多治見工業高等学校校長	富田博道氏
パネリスト	同校教諭	辻雅子氏・佐々木康延氏
	同校生徒	尾辻君弥君・足立圭君・水野暁君
	指導員	成田静子氏・三宅敏之氏・伊藤真氏
フロアー	指導員全員	

パネリストからの一言

<コーディネーター>

- 富田博道校長先生：多治見工業高等学校に赴任して3年目。今年が教職最後の年。こうした機会に皆さんと直に接することができてとても刺激的。

<パネリスト>

- 辻雅子先生：セラミック科の教諭。1年生の担任で部活では吹奏楽の顧問。本校で4年目。地域の方々との関わりを深めたい。
- 佐々木康延先生：教職2年目で本校が初めて。学校では1年生の担任で部活は野球部の顧問。日頃は先輩や生徒たちから多くのことを学んでいる。本日もそうありたい。
- 尾関君弥君：3年生で生徒会長を務める。今回は若者の代表ということで、皆の気持ちや考えを代弁し、討論に参加したい。
- 足立圭君：電子システム科の3年生。部活ではアイデアロボット部に所属、夏休みは皆勤。生徒会では議長を務めている。
- 水野暁君：3年生で演劇部所属。他の2名と違って生徒会の役員ではない。普通の生徒として参加し意見を述べたい。
- 成田静子さん：私は多治見地区の指導員。自宅は可児にも近い。この地域の若者との接触も多い。今日はとても楽しみ。
- 三宅敏之さん：瑞浪の指導員。今日は皆さんの意見をたくさん聞き自分の考えも十分に述べたい。
- 伊藤真さん：土岐地区の指導員。私には、大1・高2・中2の3人の息子がいる。だから、親としての立場からも若い人の思いを聞かせてほしい。

8月28日、東濃西部少年センターでは、若者の「本音とたてまえ」に迫る3地区合同の指導者研修会を土岐市の文化プラザで開催しました。

あいにくこの日は、多治見地区の教育フォーラムと重なりましたが、したがって、指導員の参加が50人弱と少なめでしたが、高校生を招いたパネルディスカッションでは、若者の気持ちを理解し、今後の指導に生かそうと、活発な意見が交わされました。

なお、この研修会については、翌29日の中日新聞（朝刊）と31日の岐阜新聞（朝刊）で、研修の趣旨や内容が紹介されました。

皆様には、この「センターだより」で、富田校長先生のお話（要旨）と高校生の発言の一部、指導員の感想とアンケート結果を紹介いたします。

富田校長によるお話の要旨

はじめに、日々接している本校の生徒や昔の教え子、そして自分の息子夫婦や長男のことなどを交えて、今の若者像について話してみたいと思います。

よく今の若者は、「何を考えているのか」とか「若者が見えない」とか「行動が衝動的だ」とか言われます。これはごく一部の若者のことですが、彼等は大きなエネルギーを持っているので、その行いが今の若者の全体像としてとられやすい。またこうした若者たちは、非常にプライドが高いのです。彼等が自分で口にするプライドが、本当の意味でのプライドと言えるかどうかどうかは、はなはだ疑問ではありますが・・・

その反面、大声を張り上げたり、粗暴な行為をするのですが、とても傷つきやすいし、繊細な部分を持っています。これも不思議なことです。

今、多治見や土岐の駅でたむろしている若者の大半は、高校に行っていました。しかし、何かの理由で退学したり、転学した若者たちです。彼等もまた、傷つきやすく繊細ですが、もう一つの特徴は、自分が納得しなければ動かない。自分なりの考えで、自分が「そうだ」と納得すれば動く・従うという特徴があります。

昔、私はそうしたことがよく理解できなくて、よく叱りました。叱ったことで相手は、すぐ「カッ」となり怒ってきます。そして、叱った人を嫌いになり、嫌がる傾向がありました。そういった特徴が、今の若者にも顕著にでています。

それが、先ほどの「見えなくなった」「わからなくなった」「あつかいにくくなった」ということだと思えます。

私は、問題のある生徒とよく面談をするのですが、内心は「認めて欲しい」「学校をやめないで勉強したい」「卒業して自分が成長したい」ということを強く願っています。それができないのは、そこまでもっていくだけの意志の強さがないからです。これが、彼等の姿かなと思っています。本音の部分では、「認められたい」「成長したい」というところがあります。そうしたことを、我々がどう受けとめ、うまく接するかが、大きな課題であると思います。ほんの少しの工夫があれば、何とかなると思うのですが、実際は難しい。

今若者は、実に厄介なものを持っています。それは、携帯電話です。10年20年30年前、どんな時代でも、その時々には若者は、いつも「変わった」「変わった」といわれていました。しかし、その時と違うのは、今の若者が常に携帯を持っていることです。我々が色々なアプローチをかけようとしても、メールをしていたりして、こちらの話を聞いているのか分からないことがあります。そうしたところが、手を焼くところまでつい叱ってしまいます。ところが、メールをしながらでも実はちゃんと聞いているのですね。人の話を素直に聞くための、一種の照れ隠しで携帯を使っているのです。

問題を起こす生徒たちに共通していえることは、先が自分で見えないことです。誰かが舵を取ってやらなければなりません。自分で舵が取れるなら、問題を起こすことはありません。親も教師も、敏感にその思いを感じ取って、舵を取ってやれるかどうかはポ

イントです。本校では、その舵が取れなくて問題を起こし、初めて本気で親や教師と接し、その中で気づく子は良くなっていきます。しかし、それでも理解できない子は、さらに問題をエスカレートさせていきます。ここで、学校を続けるか、辞めていくかが決まります。

話は変わりますが、よく「大人が変われば、子どもも変わる」という言葉を耳にします。私は、これに「大人の言葉と態度が変われば、子どもは変わる」と付け加えるべきだと思っています。私たち大人の語りかける言葉や示す態度が変われば子どもも変わるはずです。

例えば、職員が「校地内禁煙」のことから、校門の外でタバコを吸っているという事実に対して、彼等は、校地の内外の問題だけでなく、勤務中にタバコを吸ってもいいのかと疑問をもちます。教師が勤務中でも校地外での禁煙が許されるのなら、自分たちも、学校外なら何をしてもいいのかと反発します。

今の生徒と、我々の時代の生徒と何も変わっていません。昔も親に逆らい、先生といさかいを起こしていました。今は、生徒の服装の乱れで「腰パン」がよく話題になります。昔でも、学生服の丈を短くしたり、裾を広げたラップズボンをはいていました。では何が違っているかという点、社会環境が変わっています。これに伴って、価値観が異なり、表現力が違ってきます。この表現力の違いを大人は、理解できないでいます。

一部の親は、小学校でだめなら中学校で、中学校でだめなら高校で、それでだめなら社会にでたら変われると思っています。それは、親だけで物事を見てきたからです。いざれでできるであろうという思いが対策の無いまま安易に先送りしてきた部分と、学校がやってくれるだろう、やって欲しいという思いで過ぎてきてしまっている。

今は、親だけで子どもたちを見ていますが、昔は近所のおじさん・おばさん・学校の先生や町内のおじいさん・おばあさん、そしておまわりさんなど、地域の人々が関わっていました。今では、おまわりさんも事件性がないことには、なかなか関わってくれません。

また、我々の時代は、何でも自分で作ったり、集めたりしたものです。今は、すべて業者任せです。自分は、既製品を買って集めるだけです。お金を出せば安易に物が手に入る。人のつながりもネット上で簡単にできるから、深い仲間関係に育つ事はありません。今の子はつるんでいても、仲間内で問題が起きても「僕は、あの子と関係ない」の一言で、これまでの関係を切って捨ててしまいます。

情報の受け方によって、自分なりの友だちへのコミュニケーションのあり方も変わってきました。我々の頃は、すべての情報を大都市からの雑誌やテレビに依存していましたが、今は携帯を使いリアルタイムで情報を手に入れます。携帯が第一、携帯の情報が優先ですから、友達とのコミュニケーションは、二番手にならざるを得ない。だから、仲間関係も都合が悪くなれば簡単に切ってしまう。都合がいい時は、仲間。都合が悪くなれば“仲間でない”。これも、今の子どもたちの大きな特徴です。こうしたことから、我々は情報のあり方をしっかりと捉えてないと難しい。

さて、ここで自分の家庭のことに、話題を変えたいと思います。私の息子、長男は小学校の教員 3 年目で今年 25 歳になります。次男は、23 歳ですが、昨年結婚をしました。その時の嫁は、19 歳で非常に若い夫婦です。

彼女は、今はやりのヤンママ。2 人とも茶髪で、倅田來未と同じファッションです。今はやりのホットパンツで爪はネイルでとてもカラフルです。孫の顔には、嫁のラメがついています。これで子どもが育てられるのかと、心配するのですが、不思議と弱みを見せたくないのか、必死になっています。だからかも知れませんが、私や家内の経験からのアドバイスを素直に聞こうとしないのです。言っても返事をしないし、聞いているのか、そうでないのか分かりません。

ところが、数日たつと教えられたようにやってある。その時、素直に聞けば会話が生まれるのですが、聞けないのです。それは、自分の力で子どもを育てるのだというプライドが邪魔をしているのかと思います。非常に不思議な部分です。今日は倅田來未のコンサートがあるということで、我々にポンと子どもを預けて出かけます、それも朝から夜中まで。ただプログラムは置いて行きます。育児のメニューですね。そしてその通りにやったかどうかのチェックも必ずします。これはひょっとして、我々へのコミュニケーションなのかも知れませんが、素直になれない若者の難しさがあります。

私は食生活にも関心を持ちます。食感というものが表現力に結びつくからです。今の子どもたちは、食べ物に対して「ヤバイ」と言います。美味しくても、まずくても「超ヤバイ」と言います。普通の食感表現では、ほかほか・プリプリ・甘い・辛い当たり前のことです。「イケテル」「イイジャン」など、この表現にはまいます。

日本の食感表現は、世界で一番多いと言われています。ちなみに、四千年の歴史がある中国ですら 150 語、フランスが 250 語、欧米諸国は 100 語、その中で日本は 445 語だそうです。私は、豊かな表現力が、豊かな感性を育てるのだと思っています。食事を通して語り合えば、若者の表現力も変わるのではないかと・・・。

私は日頃多くの若者に接しているので、特に女子の変わりようにはあまり驚きません。つけまつげ・顔黒・目の周りを白くすること。その理由は、ただ自分がしたいから。似合う・似合わないは問題ではありません。彼女たちには、全てがファッションなのです。皆がやっている中で、自分だけが取り残されたくないという意識があります。これが孤独につながる・友だちから切られる、ですから携帯のメールにもすぐ返事を返す。これも、若者の特徴です。個を大切に、個の技量を大切に、という教育で学んできたはずの子どもたちが、周囲の変化や流行で、常に左右されるという、皮肉な矛盾が、今の若者たちをこのようにしたのかと思っています。

パネリストとフロアー（いずれも大人）からの質問に対して
＜若者のことば＞

◎ 今時の若者言葉「ウザイ」「ヤバイ」について

尾関君：「ウザイ」という言葉には、「うっとうしい」「うるさい」「自分にかまうな」など、相手を拒否する意思表示に使っています。また「ヤバイ」では、「この服ヤバくない」など、格好の良さや可愛らしさを、＜ゲームの危ない場面＞にぶつかった時は、「今はヤバカッタ」などと言いつつ合ったりします。つまり特定の意味を持たない、何んにでも通用する、便利な言葉として使っています。

足立君：僕も尾関君と同じですが、「凄い」という意味にも使います。

水野君：先生から注意された時に使う「ウザイ」は、「うっとうしい」という気持ちを込めて使いますが、もう一方で先生を煙たがる意味も含んでいます。友達の中で使う場合は、「おちょくりあい」言葉として、軽いのりで使っています。またコンサートの感想なども、それが良くても悪くても「ヤバイ」の一言で決めてしまえる。若者にとっては万能の言葉です。

◎ 若者に声をかける「きっかけ」について

尾関君：若者にも通じる共通の話題を、軽い気持ちで楽しそうに話しかけてくれるのがいい。あるいは、自分の若い時を振り返って、自分が今の若者の立場であったらどう受けとめたかを考えて接して欲しい。

足立君：注意される側の言い分にも、ちゃんと耳を傾けて欲しい。お互い納得しあえるムードができる事が大切。

水野君：さりげない会話、例えば「暑いね」「水分を取らないとね」「そのカバンかっこいいじゃない」等々、こんなさりげない会話から若者はのってくるのでは。話題の提供が大切ですね。

◎ 日本の経済は厳しい。就職もままならぬ。この現実について

尾関君：そうしたことに目が離せない。自分も真剣に考えなければと思っている。この状況の中でも、就職している人たち、自分の目指す道に進んでいる人は、それなりの努力をしている。ある人の言葉に「努力した人が、絶対に成功するとは限らない」けれど「成功した人は、必ず努力している」私もそう思う。

足立君：就職できない人は、やはり努力が足りないと思う。でも、どこでどのような努力をしたらいいのかわからない。この問題を考えないと。

水野君：こういう状況の中で、就職できなくてもそれは自分の成績が至らないからと納得してしまいます。それなら、本当に自分のやりたいことを目指して、上京でもしてみようか。悲愴感はありません。非常に、楽天的です。

◎ 駅の通路で見かける座り込みについて

尾関君：きわめて理由は、単純。楽だから。

水野君：立っているより座っているほうが楽。楽で楽しさを求めてしまう。要するに根性なしの人が多。ただ、自分がそういう場面を目にすれば、やはり迷惑だと感じると思う。

尾関君：一般的には、座り込みだと言われますが、本人たちは、迷惑をかけているという意識はありません。しかも、皆でいる時ほど周囲に目を向けることがおろそかになっています。

3 地区合同研修会に参加して

高校生と先生・指導員の代表の方とのディスカッションで今どきの若者の本音とたてまえを聞かせてもらいました。若者の素直な気持ちを話してくれる姿はとても好感が持てました。

話を聞いていて、同じ頃の自分に照らし合わせて、うなずいてみたり。また、親として我が子にも同じようなことを言われたのを思い出したり、納得をしたり、反省をしたり、とても勉強になった研修会でした。

「頭ごなしに叱りつける」大人でも「ムッ」とします。若者なら尚更のことだと思います。「まずは話を聞いてよ」もっともだと思います。若者の思いや考えを聞いて理解はできるものの、さあ声をかけるとなると、なかなか難しいものです。

「コミュニケーションをとる上での第一歩は、あいさつが基本である」このことを心において声をかけるようにしたいと思います。最近、高校生に出会う機会も多く声をかけてみますが、笑顔で返事をして快く話をしてくれます。しかし、問題行動の相手だと、こちらも構えてしまい挨拶さえできないのが現状です。

今回の研修では、こういったタイプの若者はいなくて話を聞くことはできませんでしたが、機会があれば色々なタイプの若者の話を聞き、接する機会があればいいと思いました。

この研修会で、指導員として小さな一歩を踏み出せたような気がします。いつも挨拶をする人・声を掛けてくれる人・話をする人として若者に認知されるように、根気よく接して行きたいと思います。(柴田弥生)

『全国青少年健全育成強調月間』にともなう啓発活動の実施について

今年も、3地区に別れ下記のように実施します。

多治見地区：11月14日(日)9時30分より

少年センター主催（詳細は、後日案内配布）

瑞浪地区：11月10日(水)16時より JR 瑞浪駅前・ピアゴ瑞浪店・パロー中央店

土岐地区：11月4日(木)16時より 土岐駅前

注：瑞浪・土岐については、市民会議主催。尚3地区の広域性を考えて、この機会に他地区への応援ができると、それぞれ盛り上がると思います。

3 地区合同研修会のアンケート結果から

	<参加者数>	<アンケートの回収結果>
多治見	28人(101人)	16人(28人)
瑞浪	7人(38人)	4人(7人)
土岐	8人(56人)	6人(8人)

()は指導員数 ()は参加者数

Q1. 研修会のテーマについて

- ① 大変良かった 28(43) ②なんともいえない 1(43) ③良くなかった 0
()は参加者総数

① ②からの感想

- ・ このテーマに基づいて直接指導にあたっている現場の先生方や生徒さんの本音や大人への要望など、生の話を聞くことができ大変良かった。この機会に自分自身の若者への見方、接し方が変わるように思う。
- ・ 日頃から一番気にかかっていることを取り上げてもらえてよかったと思います。今後の指導の糧にしたいと思います。
- ・ 今回のテーマでの話し合いだったから、若者の考え方や行動の仕方、今時の気質みたいなものを知ることができた。とてもよかったと思います。
- ・ 自分が若い時のこととダブらせて、改めて今の若者を見直すきっかけになった。彼等の気持ちを理解するきっかけになった。
- ・ テーマの設定が良かったと思います。パネラーの高校生も、このテーマの意図するところを分かってくれて、本音を語ってくれたのではないですか。
- ・ 若者と心がかようコミュニケーションのとり方が、いかに大切かを学ぶことができました。先生方も大変ですが、我々も若者との接し方をもっと勉強しなければなりません。

Q2. 研修会の進め方(パネル)について

- ①大変良かった 28(43) ②なんともいえない 1(43) ③良くなかった 0
()は参加者総数

① ②からの感想

- ・ 富田校長の会の進め方、例えば自然体の言葉づかい、パネラーの発言を適切に引き出して見えた。とても感心しました。無理だとは思いましたが、パネラーには、いわゆる問題生徒が入っているともっと良かった。
- ・ どのように会が進むのか全く想像できなかったが、実際に参加してみて、堅苦しくなく、話しやすい、聞きやすい雰囲気でも良かった。
- ・ コーディネーターの校長先生の飾らない実話をまじえたお話が、今までの

- ・ 経験にはないことで新鮮でした。
- ・ パネル形式は、初めてのことでよく分からないが、普通の講演よりは、皆が参加しているという雰囲気でもよかった。
- ・ 参加してくれた生徒達は、まじめな子だとは思ったけれど、結構本音で素直な自分達を表現してくれたと思う。大変参考になった。
- ・ 先生の考え方から生徒への考え方へやりとりが繋がっていくのが良かった。今日の生徒は全員優秀すぎる。もっと、異なった生徒もいていいと思った。
- ・ パネラーには、もっと他校の先生や生徒が入っていると興味深い別の側面がみえたかもしれない。
- ・ コーディネーターの進め方がよかった。パネラー全員の考えを良く引き出していたし、フロアーの声もよく取り上げていた。

Q3. コーディネーターの冒頭の話の内容について

- ・ 「個々の存在感を認めること」この言葉が強く印象に残っています。
- ・ 今時の若者ことば、「うざい」・「ヤバイ」などについての解説、言われた場所・話し方・言われた方の受け取り方など、大変勉強になりました。
- ・ 校長先生の飾らぬ人柄そのものが、話の内容に結びついていました。流石です。もう一度お話を聞く機会があればいいと思います。
- ・ 若者を知る事ができたが、大人は若者に近づかなければならないのか。「うざく」で「けむたい」大人も必要ではないのか。
- ・ 校長先生はじめ、お2人の先生の誠実な態度・話し振りに好感がもてた。また、校長先生の若者を多面的に分析されているお話が大変勉強になった。

Q4. センターへのコーディネーターの冒頭の話の内容について

- ・ 今回のような研修は、話も分かり易く事例が身近なことなので、とても参考になった。もっと多くの人に参加すべきだと思う。
- ・ 今回の研修は、大変価値のある者でした。もっと多くの指導員を参加させるような（強制はできないが）、義務感を持たせるような、案内の工夫が必要だと思います。
- ・ 研修会の時期等について検討の要あり。学校関係者の行事との重なりがないように考慮を。もっと多くの参加を求めよ。
- ・ 今回は、大変良い企画だったと思う。これからももっと多くの若者と語り合える機会をつくって欲しい。
- ・ 公立と私立の高校はかなり異なると思われるので、次回は私学の先生の話も聞きたい。
- ・ 子どもが変わったととらえるより、大人が子どもたちからの信頼を無くしている事が、問題ではないのか。このことを問う研修も必要では。